

# 英語の音象徴と日本語の擬音語・擬態語の関係について

## — 「言葉の感覚」を身に付ける —

Monica Hamciuc

### アブストラクト

現在、第二言語としての英語教育のみならず、第二言語教育全般において、コミュニカティブ・アプローチの影響で、会話能力の育成・促進を目的に語彙の増量、運営が強調される傾向にある。しかし、会話能力の高い学習者は必ずしも第二言語そのものの真の理解を得られているとは言えない。より高度な理解を実現するためにはメタ言語的なアプローチに基づいた指導法や習得法を取り、つまり「言葉の感覚」を育てる必要がある。本稿では、日本人の英語学習者、初級・中級における「言葉（英語）の感覚」が欠如していることを想定し、その事実を測定したく、簡単なクイズ形式実験を行い、考察、分析しながら、その結果に至った原因と対処方法について考えている。

キーワード：言語教育、言語の感覚、メタ言語、オノマトペ、音象徴

言語教育の分野では、第二言語を習得する過程における語彙の習得方法、運用方法に関する研究が数多くある。英語教育においても、語彙量と第二言語としての英語の読解力や総合理解力との相互関係について、HuHsue-chao and Nation (2000)、Hirsh and Nation (1992)ら習得済みの語彙が多ければ多いほど読解力・総合理解力が高くなると論じている。しかし、この関係は一方的ではなく、実は双方関係のようなものでも指摘する。語彙が増えれば増えるほど読解力が高まるのと同時に、読解力が高ければ高いほど新語彙の意味がその他の文脈情報からより容易に想定でき、新たな語彙の習得にも繋がるという。注目すべき点は、ここでいう読解力とは、すべての単語の理解を足して得られる理解のことではなく、一般知識、一般的な世界観もそれに加わるということである。言い換えれば、言語そのものを超えた第二言語の理解、「言語感覚」が重要な役割を持っている。そしてこの要素は現在の言語教育の目標として見なされていないが、言語教育の目的に含める必要があると私は考えている。

本稿の主張は、第二言語としての英語の習得過程上、一般的に行われている母語（ここでは、日本語）を介する習得法だけでは「言葉感覚」を養うことが難しい。一方、英語自体を介する習得法を用いて、さらに英語に関する一般知識も加えると、つまりメタ言語による習得なら、英語の仕組みの真の理解が可能となり、「言葉感覚」をつかめることができる。

一つの例を取り上げると、英語の動物の名前を学習する際、特に身近な動物、家畜などの場合は、一般的な呼び方以外は、雄・雌・子供を指す単語も別々に存在するが、日本語には似たような単語はない、あるいは使用されない。

例： dog (一般語彙)      dog (雄)      bitch (雌)      puppy (子供)  
cat (一般語彙)      tomcat (雄)      cat (雌)      kitten (子供)。

日本語の母語話者は上記のような単語を習得する際、まずは日本語には存在しない4つの新英単語 (bitch, puppy, tomcat, kitten) とこれらを総括する一般語彙 (dog, cat) との関連性を覚えようとするだろう。この際、日本語では動物の子供を示すとき「子」を使用することが多いが (たとえば、子犬・子猫)、英語では「puppy」と「kitten」では同類の関連性が見られないため別々に覚える必要があるように感じる。この方法は母語である日本語と習得言語である英語を比較させる方法です。

しかし、このような比較をせずに例文を考察すると、英語には、ある動物の属性を現す一般語彙以外、女性語・男性語、さらにその動物の子供を現す別の単語を含め、合わせて4種類の単語が存在することが分かる。この基本ルールが理解できれば、もし新しい動物の名前を初めて耳にしたときでも、その名前は必ずしも一般語彙ではない可能性があることが容易に想定でき、さらに上記の「雄・雌・子供」のどれを現すかということ調べる必要があると経験から分かる。また、一見関連性が見えなかった「puppy」と「kitten」の間でも、実際に使うと「puppy」以外に「doggy」、「kitten」以外に「kitty」という単語もしばしば使用され、「cc + y」(反復子音 + y) という音韻構造には「小さい・可愛い」という意味が含まれることが推論できる。

残念ながら、実際に学校における言語教育一般、また英語教育においても、このような言語の理解を促進し、「言語感覚」を養う指導法は採用されず、課題として残されている。

以下では、英語と日本語の「音韻感覚」の違いに焦点を当て、その育成の重要性を訴えたい。

まず、APU在学生の日本人英語学習者(初級・中級)に以下の語彙を与え、日本語と英語の意味を線で結ぶ課題(I.)、それぞれの単語と説明を母語、または英語で選ぶ課題(II.)と(III.任意)を与えて見た。その結果を分析し、原因と改善方法について述べる。

I. 次の日本語の擬音語・擬態語とその英訳を線で結ぶ

Link each of the following Japanese onomatopoeia (sound words) and their English translation.

ばたっと倒れる (たおれる)	fall one after another
ばさっと倒れる	fall flat
ばたばた倒れる	topple over
どたどた倒れる	be dead tired
ぐったり倒れる	fall with a thud
どでんと倒れる	crash

II. 次の擬音語・擬態語とその意味を線で結ぶ (For Japanese-based students only)

ばたっと倒れる	あ) 物事が次から次へと、続いて倒れたりする様子
ばさっと倒れる	い) 重い物が倒れたりする様子
ばたばた倒れる	う) 薄くて乾いたものが、少し束ねられた状態で倒れる様子
どたどた倒れる	え) 勢いよく倒れる音・様子
ぐったり倒れる	お) 疲れて弱った様子
どでんと倒れる	か) 重量のあるものが乱雑に倒れたりする音

表1

III. Connect the following expressions and their definitions/ explanations (For English-based international students only)

fall one after another	feel very weak
fall flat	make a dull sound when falling
topple over	fall with a loud noise
be dead tired	continuously, without stopping
fall with a thud	become unsteady and fall
crash	fall over

表2

結果分析

日本人英語学習者は、課題Ⅱにおいて、擬音語・擬態語を含めた文例の意味をある程度正確に説明できたと言える（全例文の正確率平均値は70%）。6つの単語の中、正解率が一番高かったのが「ぐったり倒れる＝疲れて弱った様子」90%と「ばさっと倒れる＝薄くて乾いたものが、少し束ねられた状態で倒れる様子」84%だった。また、正解率が低かった「ばたばた倒れる」と「どたどた倒れる」については、両単語の意味範疇に「たくさんの物」という意味が含まれるため、さらに方言的要素が関わるため混乱を招いたと考えられる。

一方、学習対象である英語での説明（問題Ⅲ任意）においては、高い正解率が見られたのが、「be dead tired = feel very weak」76%と「fall one after another = continuously, without stopping」71%だったが、これらの単語にはオノマトペ的要素も音象徴的要素も含まれていない。

さらに、今回の実験の中心となる日本語と英語の意味を結ぶ問題Ⅰに関しては、「ばたばた倒れる = fall one after another」89%と「ぐったり倒れる = be dead tired」は85%で、その他の4項目について、11%から32%の非常に低い正解率でした。「ばたばた倒れる・ぐったり倒れる」の両単語に関しては、英訳の「fall one after another ; be dead tired」には音象徴的要素が含まれないだけでなく、使用される語彙のすべてが基礎語彙であるため理解しやすかったと推定している。また、興味深い結果としては、「ばさっと倒れる」を「fall with a thud」と「crash」と間違えて繋げた比率は52%と高かった。この結果は、日本語の音韻感覚をそのまま英語の単語に求めたことに由来している可能性を示していると思う。つまり、音韻のみを考慮すると、日本語の「ばさっと」の/s/という音韻は英語の「thud」や「crash」に含まれる/th/や/sh/に類似しているため、これらの単語を反射神経的に関連させたと考えている。

次にこのような誤解が生じた原因、またはどのように指導すれば改善できるかという二つの問題を取り上げ考察する。

実は正解率が非常に低かった4項目には（fall flat, topple over, fall with a thud, crash）、音象徴（sound symbolism）が含まれているという点が共通している。そして、このような結果が得られたのは、英語の音象徴と日本語の音象徴が異なるためだと考えている。

次に、実験に用いたオノマトペ（擬音語・擬態語）とその英訳の単語を例に、問題となる日本語のオノマトペを英語に翻訳すると、どのような表現の違いが生じるかを見てみたい。

一般の和英辞典と和英の擬音語・擬態語辞典で調べてみた結果を以下にまとめた。

	Shogakukan <sup>i</sup>	Kenkyusha <sup>ii</sup>	A. Chang <sup>iii</sup>
ばたっと倒れる	Fall with a crash; collapsed	n/a	Fall flat, fall with a thud/ crash
ばさっと倒れる	n/a <sup>iv</sup>	n/a	n/a
ばたばた倒れる	Collapse one after another	One after another	Fall one after another
どたどた倒れる	n/a	n/a	n/a
ぐったり倒れる	Lie unconscious	(was) dead tired, (feel) weak and weary	n/a
どでんと倒れる	With a crash	n/a	Overturn with force

表3

上記の表3を見て分かるように、一般の日英辞書で取り扱われている擬音語・擬態語の数が少なく、例文もない。また日英の擬音語・擬態語専門の辞書でも語彙そのものが取り扱われていてもすべての意味が含まれないことがある。

次に日本国内で出版された擬音語・擬態語辞典3冊を調べた。

1. ばたっと倒れた

天沼<sup>v</sup>: 倒れた様子: 日射病で～と倒れた。

阿刀田・星野<sup>vi</sup>: 物が急に倒れたり打ち当たったりする音: めちゃめちゃに酔って帰ってべつどに～と倒れ込んだままぐうぐう。

山口<sup>vii</sup>: 勢いよく倒れた大きな音。

2. ばさっと倒れた

天沼: 多くの物・まとまった物が、一時に、同時にではあるが、それを形づくる個々の物が、緊密にまとまってではなく、堅固な一体の物としてではなく、ある動きをしたり、状態になったりする様子: ぴかぴかいなずまが走ったと思ったら～と家が倒れた。

阿刀田・星野: 薄くて乾いたものが、少し束ねられた状態で触れ合ったり打ち合ったりして出す音: 立てかけてあったすだれが、茶店に腰かけていた客に～と倒れかかってきた。

山口: 一度きりで紙束などが落ちる音。

3. ばたばた倒れる

天沼: 物事が次から次へと、続いて倒れたり、起こったり、行われたりする様子: 中央分離帯に植えられたユッカランが、10日もたたないうちに北風で～と8割近くも倒れ、・・・

阿刀田・星野: 平らな板状のものが打ち当たったり、倒れたり、落ちたりする音、ようす: 野外運動場に整列していた生徒が日射病で～倒れた。

山口: 次々と倒れる様子。連鎖的な感じ。

4. どたどた倒れる

天沼: 荒々しく歩いたり、走ったり、踏みつけたり、暴れ回ったりする時などの様子: n/a

阿刀田・星野: 重量のあるものが乱雑に倒れたりする連続音: 立てかけてあった材木が将棋倒しに～と倒れかかってきた。

山口: 物が崩れ落ちてくるなどして発せられるけたたましい音: ～ざーっと物凄い音がしてパン粉のような粉雪が、ふわーっと子狐におっかぶさって来ました。

5. ぐったり倒れる

天沼: 肉体的・精神的に非常に疲れたり、耐えられる限度以上の暑さ・熱さ・寒さ・冷たさ・恐怖・緊張・打撃など、異常な環境に長い時間さらされたりして、体力・気力・組織・張りなどが、ひどく弱まったり、元の、普通の、本来の、状態・性質を保っていることができなくなる様子: 野天駐車場の軽乗用車の中にひとりで残しておいた長男Nちゃん(1歳4ヶ月)が、シートで右腕をまくらに～と倒れていたのを見つけ・・・

阿刀田・星野: 肉体的・精神的疲労のため、体力や気力がぬけて、本来の状態を保つことができなくなるようす: n/a

山口: 疲れて弱った様子。

6. どでん倒れる

天沼: 物が勢いよく倒れたり、横になったりする様子(どてんの強調): n/a

阿刀田・星野: かなり重量のあるものが勢いよくひっくり返ったり、倒れたりするようす: 雪の急

斜面をかつこよく滑りおりたのはよいが、ほっと安心したとたん〜と転倒。  
 山口： 重い物がひっくりかえったりする様子。

日本語の擬音語・擬態語辞書に関しては、上記のように、説明は詳細だけでなく、例文も豊富であることが顕著である。このことから、英語と対照的に日本語において擬音語・擬態語はとても重要な文法項目であると言える。

英語には meow, bow-wow, cock-a-doodle-doo のような動物の泣き声を除けば擬音語・擬態語がとても少ないと言われている。また、オノマトペは一般的に幼児語として見なされているため幼児向けの絵本の他、日本語の擬音語・擬態語のように日常的な会話や広告宣伝、漫画や文学作品、さらに技術論文にまで利用されることが極めて稀である。

そのため、上記の擬音語・擬態語を英語に翻訳する際、日本人学習者だけではなく英語の母語話者も混乱するでしょう。

しかし、上記の文例を分析してみるとオノマトペが様々でも共起する動詞（倒れる）が共通していることが分かる。＜倒れる＞という動詞を英語に翻訳すると、先ず＜fall, tumble, collapse＞というような基本単語が浮かび上がってくる。一方、この基本単語以外、次のような単語も＜fall, tumble, collapse＞の類義語である。例えば、＜crash, bang, boom, clang, clash, smash; drop, flop, topple, toss, trip up, stumble＞などが挙げられる。一見日本語の擬音語・擬態語と何の繋がりもないのですが、考察すると次のような意味範疇がまとめられる。

基本単語	A [-(c <sup>n</sup> <sup>viii</sup> )le]	B [-sh]	C [-(v <sup>ix</sup> )ng]	D [-(v)p]	E [b—(cn)]
fall	tumble	crash	bang	drop	bang
collapse	topple	clash	clang	flop	boom
	stumble	smash		trip (up)	

表4

表4のように、類義語間では、音の変化によってニュアンスが異なる。しかし、音の組み合わせ方にはルールが存在し、そのルールを元に様々なカテゴリーが成立するため、類義語の間だけではなく、基本単語が異なる語彙範疇間でも音韻の類似に由来するニュアンスの類似が見られる。

たとえば、FALL、CUT、TALK、DRINK 4つの基本単語の類義語には、次のような単語がある。

FALL	CUT	TALK	DRINK
Crash	Gash		
Smash	Slash		
Tumble	Mangle	Mumble	Guzzle
Stumble	Whittle	Babble	Fuddle
Drop	Chop	Rap	Sip
Trip	Crop	Yap	Lap

表5

基本的な意味範疇に関していえば、「FALL、CUT、TALK、DRINK」の4単語は一見繋がっていないのだが、これらの類義語の語尾に焦点を当てると、類似している。そのため、基本的な意味が異なっても、「動作・動きのかかっている時間、繰り返しの有無、伴っている音の音質」などというような観点から類似している。

この現象を英語で sound symbolism (音象徴) と呼び、多くの言語学者はこの現象を擬音語・擬態語 (onomatopoeia) と結びつき研究している。

David Crystal (1995)<sup>x</sup>によると、表4では、

1. 列Aのような[-(cn)le]で終わる単語の多くは、繰り返される一定でない動き、または大きさ、構造、重要さに欠けることを意味している。
2. 列Bの「-sh」で終わる単語は、早くて強い動き；
3. 列Dの[-(v) p]で終わる単語は、急激さ・短さを表している。

また自己の研究では、

4. 列Cの[-(v) ng]とその他「-(v) ck, -(v) st, -(v) sh」で終わる英単語は、大きな音、うさい音を表し
5. 列Eの[b—(cn)], 「b」で始まって、子音で終わる語も大きい音、爆発音を表現することが判明した。

上記のような規則を踏まえ、表4と5を改めて考察、分析すると、基本的な意味が異なる単語の間でも共通するニュアンスが浮上する。たとえば、

- a. crash, smash と gash, slash の共通している意味要素が「速い動き、強い動き」の2つある。
- b. tumble, mangle, mumble, guzzle に共通している意味要素が「繰り返される動き、構造に欠ける」などのような要素がある。

冒頭でも述べたように、英語教育における語彙の指導は大きな課題である。

上記のような音韻規則が存在することについて英語基礎教育の現場において触れることはほとんどないが、英語語彙の音の感覚を養い、語彙の様々なニュアンスの理解を促すことは英語の読解力・総理解を向上させるための有効な手段に思う。

今後の課題としては、上記で示したような英語の音韻規則の指導を実際にクラスで用いて、「言語感覚」を育成することがどのような認知過程で、この方法がどれほど有効であるかを測り、分析することである。また、指導に当たって日本語の擬音語・擬態語を用いた説明・解説が有効であるか否かについてもさらに詳しく研究・分析したい。

#### 注

- i 参考文献1.を参照
- ii 参考文献2.を参照
- iii 参考文献3.を参照
- iv not available(記述がない)
- v 参考文献4.を参照
- vi 参考文献5.を参照
- vii 参考文献6.を参照
- viii cnはconsonant(子音)の省略
- ix vはvowel(母音)の省略
- x 参考文献7.を参照

参考文献

- Chang, Andrew C. (1990). A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia: Usage by Categories, Taishyukan Shoten
- Crystal, D. (1995). The Cambridge Encyclopedia of the English Language. Melbourne: CUP
- Hirsh, D. and Nation, P. (1992). What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure?, in Reading in a Foreign Language 8(2)
- HuHsue-chao and Paul Nation. (2000). Unknown Vocabulary Density and Reading Comprehension, in Reading in a Foreign Language 13(1)
- Kenkyuusha. (1997). Kenkyusha Lighthouse Japanese-English Dictionary. Kenkyusha
- Shogakukan. (1986). Progressive Japanese-English Dictionary. Shogakukan
- 天沼寧(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 阿刀田稔子・星野和子(2004)『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語「使い方辞典」』創拓社出版
- 山口仲美編(2003)『暮らしのことは擬音語・擬態語辞典』講談社